

安城市民ギャラリー運営委員会

令和5年11月30日(木)
午後3時30分～午後4時45分
安城市歴史博物館2階：講座室

委員：神谷会長、丸山副会長、齋藤委員、山本委員、香村委員、加藤委員
事務局（市）：加藤生涯学習部長、邨澤文化振興課長、平井係長、
谷村主事、永坂主事補、錦見社会教育指導員
指定管理者：石川事業運営部長、井上総括責任者

1 あいさつ

2 協議事項

(1) 令和5年度安城市民ギャラリー利用状況について

	(指定管理者による説明)
委員	利用状況が昨年より減少しているのは、セロテープ®アート展が以前実施した時より来場者が減少したことが影響しているのか。
指定管理者	おそらくそうではないかと思われる。

(2) 令和5年度安城市民ギャラリー事業報告について

	(事務局、指定管理者による説明)
委員	「美術で味わう 市民ギャラリーレストラン」に出品した小中学生から、賞状を喜んでいたという話を聞いた。
委員	ポスター制作講座に参加した学生やギャラリーに展覧会を観覧しに来た小中学生の話も聞いている。休日の部活動が縮小していく中で、今後中学生の意識が市民ギャラリーへと向かっていくのではないか。 ちなみに、市民ギャラリーの利用者に小中学生がどの程度いるか割合を知りたい。
事務局	利用者の人数を把握する中で、小中学生の割合を調べるのは難しい。ただ、特別展は中学生以下無料のため、人数を把握することは可能。 また、小中学生の見学学習の際は、積極的に市民ギャラリーを案内するようにしている。
委員	学校側としては今後鑑賞教育に力を入れていくべく、市民ギャラリーとの繋がりをもちたいと考えている。
委員	企画・講座等を通じて、子どもの教育の機会を増やしてもらいたい。

委員	市民公募文化事業の「アラカルトの表現者たち」は障がいを持った人たちのグループ展とのことだが、障がいを個性としてとらえて作品を見てもらえればと思う。
委員	今年の安美展は交流会も復活し、審査員と受賞者の交流をすることができた。他市と比較しても安美展は審査員が出品しているという点で特異であり、受賞者からも審査員と同じ会場で展示してもらえることが励みになるという話があった。なかには、退職し自分のために制作を続ける中で安美展には出品するという方もいる。
委員	他の市も市外からの応募を受け入れる公募展が増えてきた。安城市以外も窓口が広がってきている。
委員	市が主催する講座の受講者から受賞者も出ている。多方面から応募が増えることより良くなっていくのではないかな。
委員	多くの方に親しんでもらうということであれば、企画展などのキャプションにフリガナ、英語を表記し、外国人や子どもにも親切な展示にしていくのはどうか。
委員	キャプションの情報を多くするよりも、目録で実施する方が良いのでは。
委員	目に障がいのある人や文字を読めない人が楽しめるような、触れる展示というものがあっても良いのではないかな。
委員	書に関しては釈文があっても、何が書いてあるのか理解するのが難しい。
委員	書はどう捉えればいいかが分かりにくい。芸術としてわかるようになると良いが。
委員	洋画も昔は水彩、油絵ぐらいだったが、ミクストメディアの登場など、多様化してきている。
委員	工芸は材質も様々であり、着色に何を使ったのかわからないということもある。
委員	芸術は見て感じたものをそのまま楽しむ方法もあるが、ある程度何が書いてあるのかを理解したいという意見もある。
委員	作品をより楽しめるような解説は見ていてよいと感じる。
事務局	子どもは知識は少ないが、今までの経験を総動員して芸術を理解しようとするという話を聞いた。キャプションや解説文は芸術の理解を助ける面もあるが、すべてを説明してしまうというのも自由な作品鑑賞の妨げになってしまうので、そうならないようには気を配っている。どこまで解説するのか、キャプションに掲載するのかはこちらもジレンマがある。

(3) 令和6年度安城市民ギャラリー事業計画について

	(事務局、指定管理者による説明)
事務局	陶磁美術館の展示では、一部に触れる展示を実施する予定である。
委員	ギャラリーコンサートの再開ということだが、展示に音楽を合わせる試みは、

	過去に一般のお客様も実施していた例があった。
委員	過去に展示をした際にミニコンサートを実施したことがある。音楽を聴いた後にもう一度鑑賞すると感じ方が変わるという意見もあった。 文化センターでは音響を準備していただけだが、市民ギャラリーには音響がないので、展示に音楽を取り入れるとなると、自力で音響を用意できる人に限られる。
委員	音楽とのコラボレーションは鑑賞にも影響を及ぼしあう点で面白い取り組みになると思う。

(4) その他

3 連絡事項